

基調講演「元気なまちづくりをめざそう・五感の再生」

進士 五十八（東京農業大学名誉教授／前学長、早稲田大学大学院客員教授）

1. 五感のまちづくり

私の専門はランドスケープとあって、風景や景観を扱っています。これはまさに五感のたまものです。

今回の「五感のまちづくり」は、三つの団体のいろいろな検定を受けておられる方たちの投票も含めてやっているわけですが、エコピープルというのは、エコ検定で頑張った人です。先ほど拝見すると、かなり難しそうな検定でした。あれは知で、頭で環境を考えるのです。それから、カオリストというのは、アロマ協会ですから、感性、において感じるものです。最後にエコツーリズムですが、ツーリズムとは旅をして現場に行くことですから、身体全体で感じるものです。環境省もうまく考えて、良い団体を三つそろえて、いろいろなアプローチを前提にしていると思いました。

私は10日ほど前、台北に行きました。日中韓のシンポジウムで講演を頼まれて行ったのです。そのとき、昔からおつきあいのある政府の林務局長がおみやげをくれました。台湾ヒノキのエキス、ヒノキチオールです。日本の植民地時代から有名な阿里山のヒノキチオールが入っています。良いにおいがします。林務局や農業委員会という農水省みたいなどころに行くといつも農林産物の良さをアピールするおみやげをくださいますが、ひとに嗅がせると「ちょっときつい」となります。エキスだから濃くてかなり強烈です。つまり、あまり濃いと「におい」という言い方になり駄目なのですね。日本人はそっとおっけるイメージの「香り」という方が良い言葉だと思います。「におい」とか「嗅覚」とかは生理的とらえ方ですから、客観的です。

このように「臭い」と「香り」で、ちがう。そこでいろいろ考えて、今日は漢字の話しようと思います。これから40分お話しします。後の鼎談のイントロです。

台北のシンポジウムでは、私は日本語で6ページの原稿を書きました。台湾大学の先生が中国語に翻訳してくれました。すると4ページになりました。普通、日本語で原案を書き、英語にすると、6ページの日本語は大体7～8ページになってしまいます。一方、中国語にすると、6ページが4ページになるのです。それで、漢字というものは随分合理的だと思ったので、今日は「五感」の話を漢字でします。漢字は文字を見るだけで全部分かってしまいます。文字によっては香ってくる。ビジュアルな風景も見えてきます。漢字という象形文字はすごいということ、改めて感じました。意味を微分すると、「五感」には五つの要素がありますが、それが一つになって目でトータルに感じられるのが漢字です。これからお話ししたい景観論、私の専門のランドスケープ論も、漢字と同様にトータルな状態を「風景の目」すなわち「一目瞭然」で一瞬にして、全体をわかってしまうという“五感の術”とでもよぶべきものです。例えば、私の著書、中公新書の『日本の庭園』には、“技とこころ”とサブタイトルがあります。モノとココロが一体化したものが日本の庭という

空間文化なのです。これを今回の主催者の環境省からいえば、日本の国土の環境をいかに考えるべきかという場合でも、基本はまさにトータルランドスケープで捉えなければいけません。

2. 私の「風景デザイン」論

ちょうど20世紀から21世紀の変わり目に、私は『風景デザイン』（学芸出版社、1999）を書きました。これからは、プライドのもてる景観や風景をつくっていこう。これからは美しい風景、美しい日本をつくろうという時代になるべきだ、との趣旨です。そのとき、サブタイトルに「感性とボランティアのまちづくり」と付けました。私は以前、『アメニティ・デザイン』という本も書いていますが、そのときは、「本当の環境づくり」という言い方をしました。環境というと、水質や騒音など従来の典型7公害という要素に分けてしまい、それぞれをクリアすれば良い環境になるかのように錯覚させていました。それは錯覚でしかありません。公害という問題だらけのネガティブな環境、ひどい環境の時代だった。だから、それぞれに対策を打つ。水が汚れていけば水質基準を上げていくという努力をしました。しかしこれは、公害対策です。ポジティブに環境を創るのはもっと先のアメニティです。もっとよくしようということです。

それはアメニティという言葉で象徴しました。20世紀はアメニティからもほど遠い。随分いろいろな面で足りない。何が一番か、考えたのが感性です。要するに、20世紀は知です。頭でやっていこうとしたのです。検定もそうですが、知識第一です。とにかくお勉強です。日本人は勉強しすぎて、感じることは忘れてしまったような気がします。それで、「知性」の反語である「感性」を掲げました。もう一つは、自分本位、自己中心でやってきました。だから、「ボランティア」という言葉を入れました。21世紀のわれわれの課題は、この「感性」と「ボランティア」ではないかと思ったからです。

「感性」とは、簡単に言うと「ものの価値に気付く感覚や能力」です。私は最も人間として重要な性質ではないかと思います。今回、写真コンクールもやりました。皆さんからたくさんのご応募をいただきました。ここに参加された皆さんは感性の価値に気付いて、それを写真という形で発見してくださったのです。ものの価値というのは、その場所の価値です。それは、土地の価値、本当の場所や物の価値、人の価値も含んでいるのです。自己中心というのは、自分だけが偉いと思い、他人は駄目だと思ふこと。これに対して、仲間づくりをやるということは、相手を認めるということです。

マスコミの力は、わずかの時間である特定の人にスポットを当て、一瞬にしてブームのようにし、半年ぐらい使ったらすぐ駄目にして、取り替えていきます。人間までも消耗品にしてしまっている。人間は、70年、80年、生きる生き物です。高齢化社会といって、年寄りは何の意味もないように言うのはとんでもない。たくさん体験を持った人的能力のストックです。だからこそ、人間の価値に気付くことがいま最も大事なのです。今回のコンクールも、ある意味で皆さんにそういう自覚を促すイベントでもあったと思います。物

の価値、場所の価値、風景の価値、人の価値に気付く能力や感覚を取り戻すことを手助けするイベントです。あたかも学校は知識だけを教え、覚えさせ、試験をするところだと考えられていますが、そうではない。子どもたちの五感の能力を十分に鍛え、発現させるトレーニングの機能を学校はもっています。

感性を大事にする暮らし。つまり「五感のまちづくり」は、とても重要なことだと思います。その「五感」に、今日は「元気」というタイトルを付けました。「元気」の反対は「病氣」です。「病氣」というのは、「気が病む」のです。「気」「気配」というのは、全体の雰囲気です。「空気を読む」というものもあります。いまの人は「空気を読めない」人が多いようですが。この「気」もそうで、雰囲気というものは全体像です。触覚だけでもない、臭覚だけでもない、五感のすべてを全開して、心身の全体をもっと元気にするということです。それは五感で表現できます。本当は五感だけではありません。気には六感か七感、八感まで入っているでしょうね。

私は、この景観論を書くに当たり、三つの段階論で構成しました。景観論と風景論と風景デザイン論の3つに分けました。皆さんの目が開いている限り、情報はみんな目に入っていきます。これを視覚といいます。ビジュアルです。例えば、私の今日のブレザーはベージュ色だということが皆さん分かります。布はウールとか、そういうことが誰にも共通に分かります。しかし、目に入った情報は、頭で過去の記録や思い出とセットになりますから、こういう色を見ると、昔の彼氏がそうだったという女性はぐっと来るかもしれない。ビジュアルな情報、すなわち視覚的環境情報はみんなに共通です。目の情報は客観的で誰にも同じに伝わりますが、これに、脳で頭の中にある過去の記憶や思い出、教養と言ってもいいですが、そういうものが加わると、景観情報の味わいは個々人で変わります。これが「風景」です。「風景」というのは非常に古い中国の言葉です。景観、ビジュアルで客観的、それが風景でもっと自分らしくなる、この二つの段階を経て、それがまちづくりという第3段階の風景デザインという行為につながると私は考えています。

3. 「静夜思」から見えること

風景論の入り口で、一つだけ紹介したいと思います。「静夜思」という李白の詩があります。「牀前に月光を見る 疑うらくは是れ 地上の霜かと 頭を挙げては 山月を望み 頭を低れては 故郷を思う」という詩です。牀前というのはベッドです。ベッドに横たわっていて、窓の外月の光を見ているわけです。すると、あまり月の光がさえわたっていて、いかにも霜が下りているように青白く見えたのでしょう。「疑うらくは是れ 地上の霜かと」。そして、「頭を挙げては 山月を望み」、窓の外を見ながら頭を上げると、そこに月がかかる。月待ち山といますが、お月様は大体山にかかったところが格好良いのです。京都の銀閣寺の背後の山には「月待山」という優雅な名前が付いています。あそこにかかる月は最高だと。月は、海にかかろうと、平野にかかろうと、どこの山にかかろうとみんな同じはずなのですが、日本の古代、中世の人たちは、山にかかった月が良いというのです。

それで「月待山」という名前を付けます。「頭を挙げては 山月を望み 頭を低れては」、本当は頭を垂れると床が見えるのです。ところがここでは、床は見えないのです。「故郷を思う」、懐かしい古里を思う。これを内観といいます。つまりわれわれは、肉体の動かし方、首を上げるか下げるかで、外を見たり、心の中を見たりするわけです。ここが大事です。風景というのは、全身的なものであるということです。体の動かし方で風景の感じ方は違ってくるといえることです。「五感」ということは、実は全身感覚、心と身体の一体的感覚だということではいけない。だから昔から「医食同源」「身土不二」というのです。

4. 五感をフル活用して風景を味わう方法

五感をフルに生かして、その地域とか環境の良さを味わおうという方法を中国の人たちは発明しました。中国では宋代、「瀟湘八景」という、風景の味わい方というか、風景を読む詩があります。瀟湘というのは、日本では湘南海岸で有名ですが、江ノ島辺りはこの「湘」の模倣です。「ショウ」は、「瀟」と「湘」の二つがあります。それは別々で二つの湖です。その二つがぶつかった所の風景がとても素晴らしいということで、そのベスト8の風景を「瀟湘八景」として詠んだのです。平沙の落雁、遠浦の帰帆、山市の晴嵐、江天の暮雪、洞庭の秋月、瀟湘の夜雨、煙寺の晩鐘、漁村の夕照といいます。

これをモデルにした日本でのコピーが近江八景です。私は「八景式風景観」と呼ぶ方法でこの特徴を申し上げます。まず一つは、地域の全体の風景を感じようという姿勢です。全部で八景とか十景とか、全体で見る方法が良い。1カ所だけワンポイント、ピンポイントではなく、はじめから全部を見ようという目があることです。これが五感のまちづくり、環境の視点の大事なところ。今の世の中は、何でもピンポイントで考えますが、それは縦割りだからです。例えば、行政では自分の課のことしか考えない。企業もそうです。いろいろな技術屋がいて、化学屋さん、物理屋さん、機械屋さん、電気さんと分かると、そのことだけしか考えません。ですから、香りが受けるというと、ヒノキから香りだけ取り出してこういうものを作るわけです。でも本当は、阿里山の風景全体をアピールし全体を考えさせなければいけない。阿里山には有名な高山茶があります。あそこのお茶も良い香りです。ヒノキのエッセンスであるヒノキチオールだけ取り出すのは工業的発想、あるいは分業的発想です。台湾ヒノキのすばらしさは、木材としても、巨木林の風景としても、台湾の国家公園のすばらしさとしてでもあって、香りだけでは部分なのです。本当は、一部の機能だけピンポイントで取り出すのではなく、全体を見せることが必要です。今の政治もそうだと思います。みんな分業化していて、自分のことだけ言うから、国全体が全然まとまらないのです。

日本三景、近江八景、天龍寺十景、本朝十二景、かながわ景勝五十選、せたがや百景、新日本百景、東京千景といろいろ挙げました。最近では、私は江戸川百景とか、福井ふるさと百景の選定をすすめています。せたがや百景は、私が昔、提案して始めました。日本三景、近江八景というのは、いわゆる名勝といって美しい風景を選びます。私は、東京の世

田谷でこれを考えたときには、世田谷で日本を代表する名勝風景はちょっとやりづらい。そこで観光的風景ではない、生活風景、日常の生活を自分の町全体のお宝としてとらえるべきという見方が大事だと、「生活風景論」を書きました。せたがや百景では、三軒茶屋の、あるいは太子堂の防火対策をしなければならないような路地っぼい、ちょっとごちゃごちゃして都市計画には困った所、でも、住んでいる人たちには何とも居心地の良い所です。そういう限界性のあるところも大事だということで一景にしました。

風景というのは、その時代の、その土地の人々の生き方というか、環境に対する感じ方が出ているわけです。ですから、日本三景、近江八景のような名勝観光地的な格好良いものを選ぶのも良いし、せたがや百景のように生活の中の風景を選ぶのも良いと思いますが、いずれにせよ大切なことは、全体でものを考えるということです。

八景式風景観の特徴の二つは、土地の山や水辺などの場所名、地形的な特色と、そこで季節、時間、動植物の存在など情景の両方を大体4文字で表現していることです。例えば、煙寺晩鐘、三井晩鐘、称名晩鐘となります。これは横浜の金沢で金沢八景、称名寺という北条氏が造ったお寺の中に、金沢文庫もあります。その称名寺の夕方の鐘がゴーンと聞こえる。サウンドスケープですね。近江八景になると、三井寺の鐘が鳴ります。瀟湘八景では、煙寺というお寺の鐘です。みんな同じです。鐘の音は少しずつ違うかもしれませんが。

八景の一景ずつは、すごくよくできたテキストです。下の2文字ずつの8組は同じです。一部、少し手直しすることもあるって、「夕照」を「夕映」にしたりしてもいい。その辺は自由自在ですが、その下の2文字は情景を表します。上の2文字は土地、地形、場所を表します。土地や場所、ある固有の地域に対する思い入れです。今回、後で表彰される環境大臣賞は飛騨高山です。飛騨高山と聞いただけで得をしていますね。これは、場所というものすごいです。今の人々だけが努力したわけではないのですが、長年の間に良いイメージが構成されたわけです。その反対に、行くと本当は素晴らしいのに、昔、公害病があったという場所などは本当にお気の毒なくらい損をしています。

場所には、場所特有の情景がある。この八景式風景論の特色は、土地や場所、地域というものをよく見詰め、その場所の輝く一瞬を表したということです。下の2文字、時間・季節・動植物・気象・風物などの情景。晩鐘とは、耳で聞こえるゴーンという鐘の音です。秋月というのは、秋の月です。夜の雨、夕映え、夕日、全部時間です。朝昼晩。それからお月様が出る、あるいは夕日が沈む。雨が降る、雪が降るといのは自然現象です。現代日本人は、雨が降ると「困ったものだ」とドームや地下街やアーケードを作り、雨が降らないようにします。その方がイベントがやりやすく、ビジネス上は有効だからです。しかし、それでは芝生は育たないので、人工芝にしてしまうわけです。しかし本当は、立派に太陽が照って大地をうるおしてくれるわけですから、雨を味わうという価値観があつていいのかもしれませんが。これまでの日本人は、人間の五感をフルに動員してそういうものを味わってきたわけです。

5. 八景式風景観の知恵を再評価

私がかつて研究した「金沢八景」という景勝地の発展段階では、3つの段階を経て有名観光地になっていったことがわかります。第一段階では、あまり知られていないので、かなり詳細な絵地図が刊行されています。金沢八景についてのたくさんの絵図を分析してみます。すると、最初は金沢八景を訪ね歩く旅のマップが板行されるのです。金沢八景は、鎌倉から江戸への戻りによる場所です。江戸の市民は、青山通りを通って、昔は大山道といましたが、神奈川の丹沢、大山阿夫利神社にお参りする。雨乞いの神様です。そして、江ノ島に回り弁天様にお参りし、それから金沢八景に回ります。江戸の初期はまだ観光ルートがきっちり確立していませんから、金沢八景の絵図を探すと、大体初期は地図で、ルートマップになっています。

それがだんだん有名になって誰でも分かって、大勢行くようになると、金沢八景を一望できる能見台という高台からの全貌を一枚にまとめた絵図になります。そして最後は金沢八景の一景ずつが一枚の浮世絵となっていて、ここには美人が登場します。傘を差して、松の木に寄りそう格好良い女性の姿です。それは「小泉の夜雨」とある。夜の雨には、女性が似合うのです。「乙艦の帰帆」があります。乙艦海岸という小さな海岸があります。伊藤博文がここに庵を構えて、明治憲法を練った場所です。そういう松林のある風景の良いところに「乙艦の帰帆」と名が付いています。帰帆というのは、舟が帰ってくるということです。舟は漁師の舟です。生業のある風景だということです。風景は、日常や産業、経済などと無縁に、ただきれいな、ただ品の良いものを集めるだけではないのです。リアルな風景は、日常の生産の風景も生業の風景も、大事な大事な要素なのです。

「落雁」、雁が下りてくる、鳥が翔んでいるわけです。昨年、COP10で生物多様性が盛んに言われました。鳥のような生き物も風景の中の大切な要素です。後でお見せしますが、西湖十景には「花港の観魚」が登場します。環境の中のありとあらゆる要素が、山も川も、鳥も木も、寺も猟師も全部取り込まれて、それをすべて味わおうとする風景の見せ方が八景色風景観の良さなのです。

地名に由来する場所や土地自然も多様性に富んでいます。いろいろな地形を味わおうとしているのです。例えば近江八景は、琵琶湖の南の方に八つのポイントがありますが、堅田には浮御堂があります。陸から橋が架かって、杭をいっぱい立てた上にお堂を建て、そこにたくさんの仏様をおまつりしています。御堂というのは仏様を入れている建物ということで、それが水の上に浮いているので、浮御堂といいます。この浮御堂が、デザイン化されて灯籠になったのが雪見灯籠という庭灯籠です。料亭に行くと、あるいは皆さんの家にもあるかもしれませんが、石の雪見灯籠があるでしょう。あれは浮御堂を表します。浮御堂のある堅田というところに雁が下りてくるのが「堅田の落雁」という一景です。

「粟津の晴嵐」には、「津」が付いています。津は港町を指します。「比良」というと、比良山のことで、雪をかぶった比良山が「比良の暮雪」です。ですから、そこには山もあれば、田んぼもあれば、港もある。「石山の秋月」というのは石山寺というお寺です。これ

は、紫式部が『源氏物語』を書いた場所です。そういうふうに、そういう教養さえあれば、八景から情景が膨らんでくるわけです。

問題は、そういう情景を思い出し膨らませることのできる感性を現代は教育していないということです。江戸時代には町役ぐらいの人、農村だと村役をやっているような人なら、このぐらいはみんな知っていました。だから、日本中、城下町に行けば、どこに行っても〇〇八景があります。東京でも玉川八景。行善寺という玉川高島屋の近くのお寺から詠んだ行善寺八景というのがあります。簡単なことで「登戸の〇〇」というように、地名に情景を入れればいい。比良のところは山を入れればいいし、晩鐘のところはお寺を入れればいい。どこでもお寺もあれば、山もあれば川も流れているわけですから、日本中の町でそれぞれ何とか八景は可能なわけです。オリジンは、瀟湘八景です。それが奈良八景、近江八景というように日本にも導入されて、それが江戸時代になると全国に行き渡りました。昔の人たちは、こういう八景式の風景を手本に、自らの土地柄を発見し、位置づけ皆で味わってきたわけです。また、それを味わう目も持っていました。夜の雨を嫌がって、地下街を開発し、商店街やアーケードを造る現代人はどんなにか駄目かということです。

見る側もそうです。せっかくお宝がいっぱいある自分の町なのに、「何もないですよ、うちには」と言います。私はあちこちの自治体で景観計画を作ってきましたが、大抵、「いや、うちには景観なんて言えるものはないのですが」と言われます。何を言っているのか。目に映るものは全部、景観です。何がなんでも「美しい」景観や「格好良い」景観でなければといえ別かかもしれませんが、すべてのまちには必ず緑も水も歴史もあって、それぞれ郷土景観です。目に映った環境を景観といっているわけですから、環境のないところはない。それを見る目があるかないかが問題です。

6. 夢窓国師の言葉

夢窓国師は、「庭に得失はなし、得失は人の心にあり」と言っています。庭は、庭園です。夢窓国師は、京都の西芳寺（苔寺）や天龍寺など立派な庭園をたくさん造った人です。鎌倉の瑞泉寺もそうです。彼は、その庭が得失、良い悪い、プラスマイナスはない。良い悪いというのは、見ている人の心にあるのだと言っています。われわれ現代人が今最も問われているのは、自らの感性を研ぎ澄ますこと、感性を育て自覚することです。そして、その目でしっかりと自分の町を見ることです。そして、そこから良いものを発見し、味わうことです。L・M・N法と私は名づけているのですが、路傍のなにげないスポットにも、光をあて（ライト・アップ）、意味づけをし（ミーン・イット）、名称をつける（ネーム・イット）することで、その場所は風景資産として顕在化できるのです。

まちづくりというのは、実はそういう作業をみんなでタウンウォッチングしてみつけることです。まちづくりというと、文化会館を造るとか、コミュニティーセンターを造らなければいけない、彫刻を置かなければいけないなど、すぐに物をイメージしますが、それだけではありません。そこに必要なら勿論、そういうクリエイティブなものを置いても良

いのです。しかし、ただ物を置けばまちづくりになるわけではない。その前提がとても大事なのです。

7. 孤篷庵 — 風景を味わう教養

これは、小堀遠州という人が造った孤篷庵という彼の菩提寺の庭です。近江八景を縮景したものです。小さな1坪余の狭い部分です。大徳寺の塔頭の一つです。雪見灯籠があります。浮御堂ですから堅田の落雁に当たります。右の方に小さな石の橋があります。これが、瀬田の唐橋という橋です。瀬田の唐橋、瀬田の大橋というのは、宇治川に架かっています。宇治川は、琵琶湖の水が流れ出るところです。これが瀬田の夕照に当たるわけです。刈り込んだサツキの丸いのは比良山です。比良の暮雪になるわけです。たった1坪の中に近江八景を縮景してしまったのです。風景遊びと言ってもいいでしょう。問題は、この刈り込みと、あの石橋と、雪見灯籠の配置を、「ああ、近江八景だ」と思えるかどうかですね。今皆さんに説明したから多分理解されたでしょうが、大抵は「狭い庭ね」「そんなにお金がかかっていませんね」とおっしゃるだけでしょう。昔は、近江八景や瀟湘八景の風景詩や風景画をみんな知っていました。しかし、今は知っている人と知らない人の差は大きい。例えば徳川時代の江戸城には、西湖の絵が描かれた西湖の間がありました。現代日本には、そういう機会がほとんどなくなってしまっています。そんな中、風景、あるいは五感の再生は可能でしょうか。

8. 西湖十景に学ぶトータルな環境整備

杭州に西湖という湖があります。この湖の周りの文化的風景は、実は人為的に造られた風景です。Man-made landscape です。Cultural landscape (文化的景観)です。風景の骨格は、自然が与えましたが、それに人間が手を加えてよくしていったのです。今風に言うと、公共事業、社会資本整備ということになります。西湖十景の成立プロセスから、日本の公共事業は学ぶべきです。

西湖十景はどうやってできたかという、実は洪水対策から始まるのです。杭州という町があります。その町の西側に湖があり、その湖の周りは山で囲まれています。この湖は、山に雨が降ると、みんな泥が流入します。泥がたくさん入ると湖底が上がってしまい、水があふれ、洪水になります。そこで、ここの地方長官に赴任したのが白楽天と蘇東坡です。皆さんよくご存じの詩人です。白居易と蘇軾という詩人が知事としてやってきてする仕事は洪水対策です。湖の底を浚渫（しゅんせつ）します。その浚渫した土を集めて堤を築きます。蘇東坡が造った堤ということで、蘇堤と名が付いています。浚渫した泥を集めて、向こう岸とつなぐバイパスを造ったわけです。湖の中に堤をまっすぐ通してバイパスを造りました。そして、そこへ柳を植える。そして、ここは漁業が盛んですから、漁師があちこちへ行かなければいけませんから、堤のところどころに大きなアーチ橋を架けて、舟が行ったり来たりもできるようにします。こうやってこの風景はできていきます。洪水

対策という公共事業ではあっても、最初から植樹したり架橋したり、建築にバリエーションをつけたりして、全体として画家が絵を描き、詩人が詩を詠みたくなるような雰囲気のあるものにしていった。もっと言うと、文化的にしていった。文化的土木工事をすると、こういうことができていきます。今、5,000万の観光客が1年に来ます。

その一角に、曲院風荷、風荷というのはハスのことです。曲院は建物の名前です。こういうスポット的景観が10ポイントあって「西湖十景」はできています。保俶塔という塔が立っています。私は、あの上に行くとも全体の写真が撮れると思って行きましたが、あれは登れない塔なのです。あの辺に塔があるといいなあと、絵を描く人は分かるでしょう。この辺に教会があると絵になるとか。土の塊のレンガをただ積んで、中までびっしりです。上れません。ただ眺望されるそういう塔を建てたわけです。これは景観対策ですね。こういうふうにして、西湖十景は詩題、画題として有名になっていくわけです。

年間5,000万人を集める世界的観光地風景は、公共事業、土木事業、洪水対策のような必須な、どうしても必要不可欠なものから始まって、しかし絵心や詩心をかき立てるような風景的配慮、すなわち感性に訴える創造行為を重ねることによってつくられていったのです。そしてそれは、「白氏文集」などを通じて、江戸城に集う大名たちの教養になっていきました。江戸城には「西湖の間」があり、「西湖図」が描かれていたわけです。それを眺めていた大名たちは国元の広島縮景園、水戸の偕楽園、小石川の後楽園、紀州和歌山の養翠園に、それぞれ西湖の風景をつくります。私が言いたいのは、そのようにしてほかの国にまで影響を与えるような風景モデルは、洪水対策の公共事業から始まって成立したのだということです。五感を働かせながらの仕事が大切なのです。

その風景の基の考え方、私は八景式風景観と呼びますが、五感に刺激を与える、五感で成り立つ景観論です。場所や土地を大事にし、そしてそこで音を感じたり目で見たり、春夏秋冬を感じたり、朝と夜を感じたり、夕日と朝日を感じたりすることなのです。今でも私たちの身近な環境にも、これらのすべての条件は整っています。見る側の人間がそういう感性を持っているかどうかは問われるだけです。

五感のまちづくりとは、環境の時代における市民生活のありよう、新しいライフスタイルを提案しようということです。環境というものをいかにしてトータルに感じるかということです。これからも3団体その他関係者のご協力を得て、ぜひ続けてほしいと思っています。